

中国と二つの交流

近年、文化財の分野においても、国際的な活動が盛んとなってきている。1991年度、奈良国立文化財研究所は中国と本格的な研究交流を開始した。これまでも中国の関係期間との単発的な交流を行ってきたが、将来を見通した計画的なものはなかった。

1. 友好共同研究議定書

1991年6月19日、北京において奈良国立文化財研究所と中国社会科学院考古研究所との間で「友好共同研究議定書」を調印した。これは9条の本文と2件の付則からなるもので、本文では両研究所の学術交流をはかるため、計画的な共同研究を実施し、研究者の交流ならびに学術情報・資料の交換をのべる。また、協定の有効期間を5カ年とし必要に応じて延長できるとする。付則には当面の研究課題を「日本古代都城と中国都城との考古学的比較研究」とすることを明記している。

共同研究は文部省科学研究補助金（国際共同研究、代表鈴木嘉吉）によって開始し、6月には鈴木嘉吉・町田章・木全敬蔵・綾村宏が中国に赴き、議定書の調印を行うとともに河北省の鄴城をはじめとする代表的な歴代の都城を踏査した。9月2日から2カ月間、考古研究所の劉振東・常青が来日し平城宮・藤原宮など日本の都城遺跡を調査し、日本考古学の現状などについての研究を行った。10月4日からの2カ月間には深澤芳樹・玉田芳英を考古研究所に派遣し、都城遺跡の実際を調査するとともに各地の関連遺跡を踏査した。1992年3月の2週間、考古研究所から副所長の徐光冀をはじめ劉観民・王岩・段鵬琦が来日し、18日には奈良国立文化財研究所において、「日中都城研究の現状」と題する公開の研究会を開催した。

2. 芸術文化振興基金助成金による中国の調査

古都調査保存協力会（会長青山茂）の要請にもとづいて、中国における「伝統的文化財技術の調査研究」を実施した。これは日本ではすでに減びさった文化財に関する保存技術を中国ないしは朝鮮半島で見いだし、実態を調査し、日本における文化財の保存技術を向上させようとするのが主目的である。今年度は伝世建築部門と埋蔵遺構部門とにわかれ、つぎのような調査を中国で行った。

1991年10月、伝世建築部門：濱島正士（国立歴史民族博物館）・浅川滋男。福建・広東・貴州省で古建築の予備調査。埋蔵部門：牛川喜幸・町田章・川越俊一・山崎信二（以上測量・観察）、沢田正昭（保存措置）、佃幹雄（写真撮影）、先年発見された陝西省咸陽市郊外で発見された西渭橋の木造橋脚（1号橋は前漢代、2号橋は唐代）に関する調査。

1992年2月、埋蔵部門：坪井清足（大阪府文化財センター）・森郁夫（京都国立博物館）・町田章・巽淳一郎・中村慎一、江蘇省南部における南朝時代の石造遺構を中心に調査。

3月、伝世建築部門：伊原恵司（文化財建造物保存技術協会）・杉野丞（愛知工業大学）・細見啓三・島田敏男、福建省において古寺廟や民家などを調査。（町田 章）